添付資料 5

鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託
（地質調査業務）

報告書

令和6年3月

中外テクノス株式会社

目　　次

１　調査概要　……………………………………　1
２　地形概要　……………………………………　3
３　地質概要　……………………………………　5
４　調査・試験方法　……………………………　7
５　ボーリング調査結果　………………………　１２
６　考察　…………………………………………　１６
７　液状化予測図　………………………………　２０

－巻末資料－

巻末資料１　調査地点位置図
巻末資料２　ボーリング柱状図
巻末資料３　泥岩（土丹）の上面標高想定等高線図
巻末資料４　現場記録写真

土質標本一式（別途提出）

1　調査概要

⑴　調査件名

鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託（地質調査業務）

⑵　調査場所

神奈川県鎌倉市大町5丁目11番16号（名越クリーンセンター）

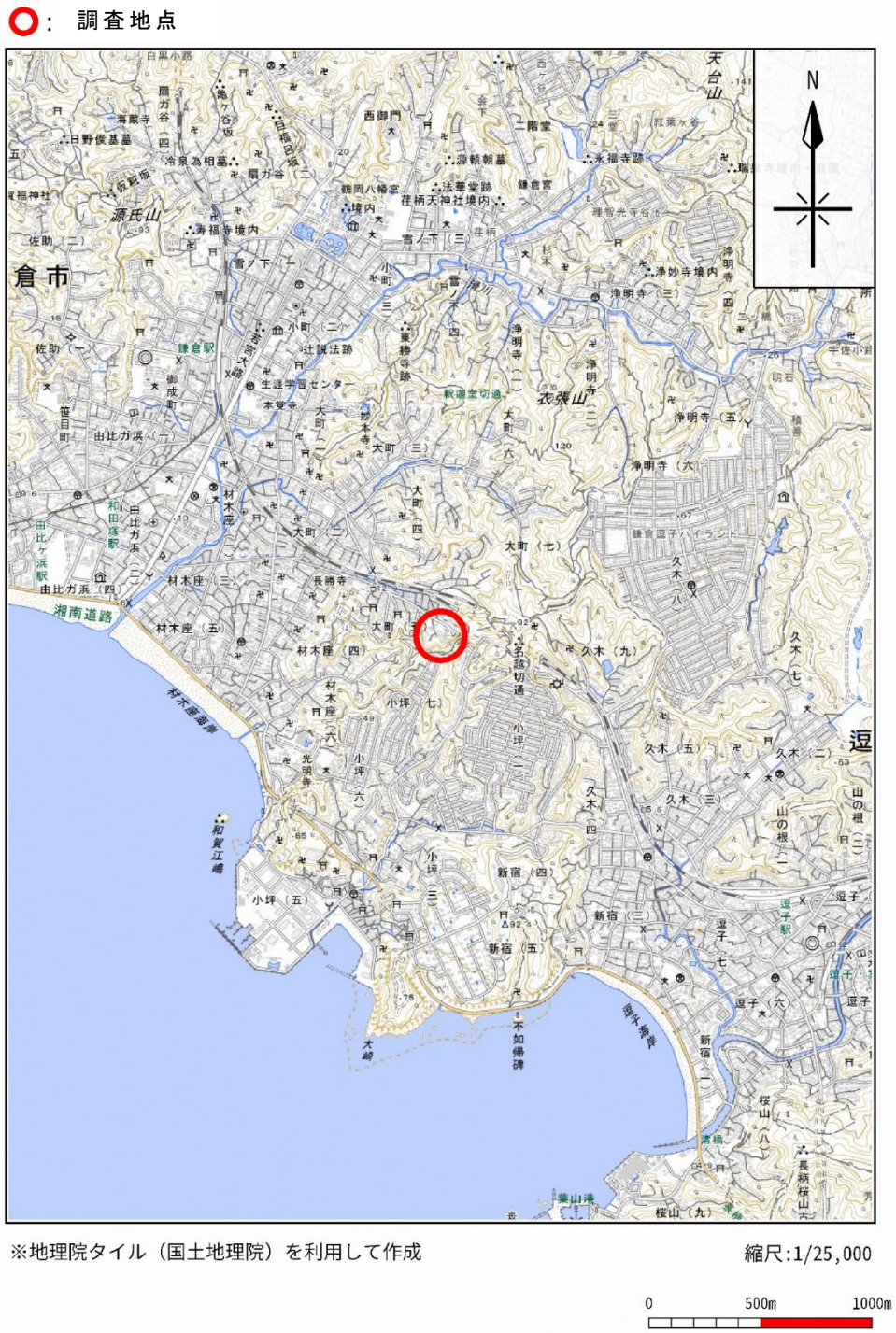


図 1.1　調査地案内図

⑶　現場作業期間

令和４年(2022年)10月11日～令和４年(2022年)10月18日

⑷　調査目的

本調査は、当該調査場所に計画している建築物の建設に際し、敷地地盤の土層構成及び土質工学的特性を把握し、設計・施工上の基礎的資料を得ることを目的として実施した。

⑸　調査内容

ア　機械ボーリング掘進長（3か所）　　計56.0m

イ　標準貫入試験　　計56 回

（調査数量の詳細は表4.1参照）

⑹　発注者

鎌倉市環境部環境施設課

⑺　受注者

中外テクノス株式会社

⑻　調査担当

株式会社東建ジオテック　本店

〒330-0062 埼玉県さいたま市浦和区仲町 3-13-10

TEL 048-824-9993 ／ FAX 048-826-0151

担当技術者：[redacted]

管理技術者：[redacted]（ 技術士，建設部門）

照査技術者：[redacted]（ 技術士，建設部門）

⑼　参考報告書

ア　鎌倉市名越塵芥焼却場建設工事に伴う測量及び地質調査工事（昭和40年　京浜調査工事株式会社）

イ　名越清掃工場地質調査（昭和53年　第一開発株式会社）

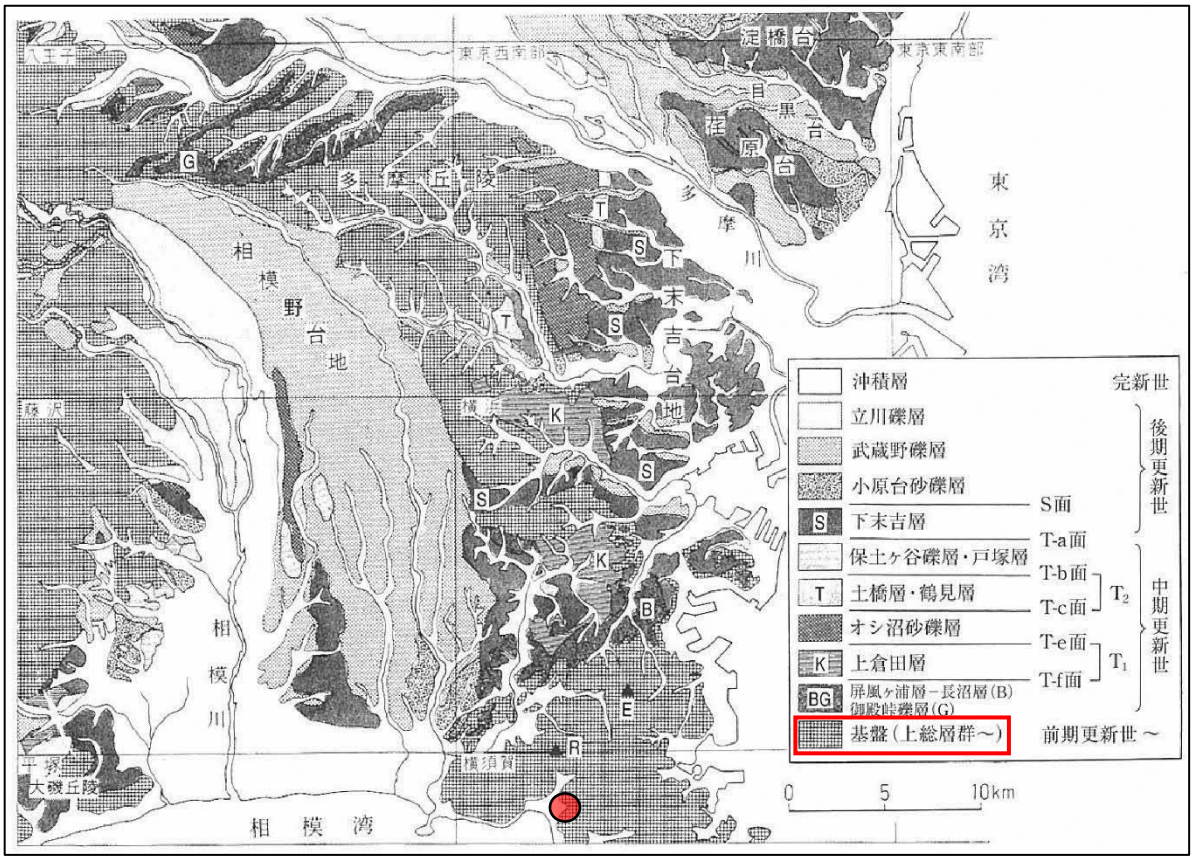
2　地形概要

調査地点は JR 横須賀線鎌倉駅の南東約 1.5km にあり、名越クリーンセンターの敷地内である。

図 2.1 に多摩丘陵一帯の地形面区分図を示す。

調査地点一帯には、多摩丘陵と称される丘陵地が広がっている。多摩丘陵は東京都の西部と神奈川県に分布する丘陵であり、多摩川、鶴見川及びそれらの支川である中小河川により開析、形成された谷地が樹枝状に発達している。

調査地点は多摩丘陵の南部（三浦丘陵との境界部）に位置しており、調査地の南西には「相模湾」が広がっている。



出典:『日本の地形 4 関東·伊豆小笠原』東京大学出版会，2020，P239 より引用加筆

図 2.1　多摩丘陵一帯の地形面区分図(●：調査地点)

調査地点周辺の微地形を示す土地区分図は、図 2.2 のとおりである。

調査地点付近一帯は、山地及び丘陵地を中小の支谷が開析し、起伏のある地形を呈している。調査地点は後述するボーリング調査結果から、丘陵を開析する低地（谷地）に位置しており、丘陵地との境は比高 20m 前後の急崖を成している。

また、調査地点の西方には相模湾の沿岸流によって形成された「砂州・砂堆」が分布している。

出典:「土地条件図」国土地理院ホームページより引用加筆

図 2.2 調査地点付近の微地形区分図（○:調査地点）

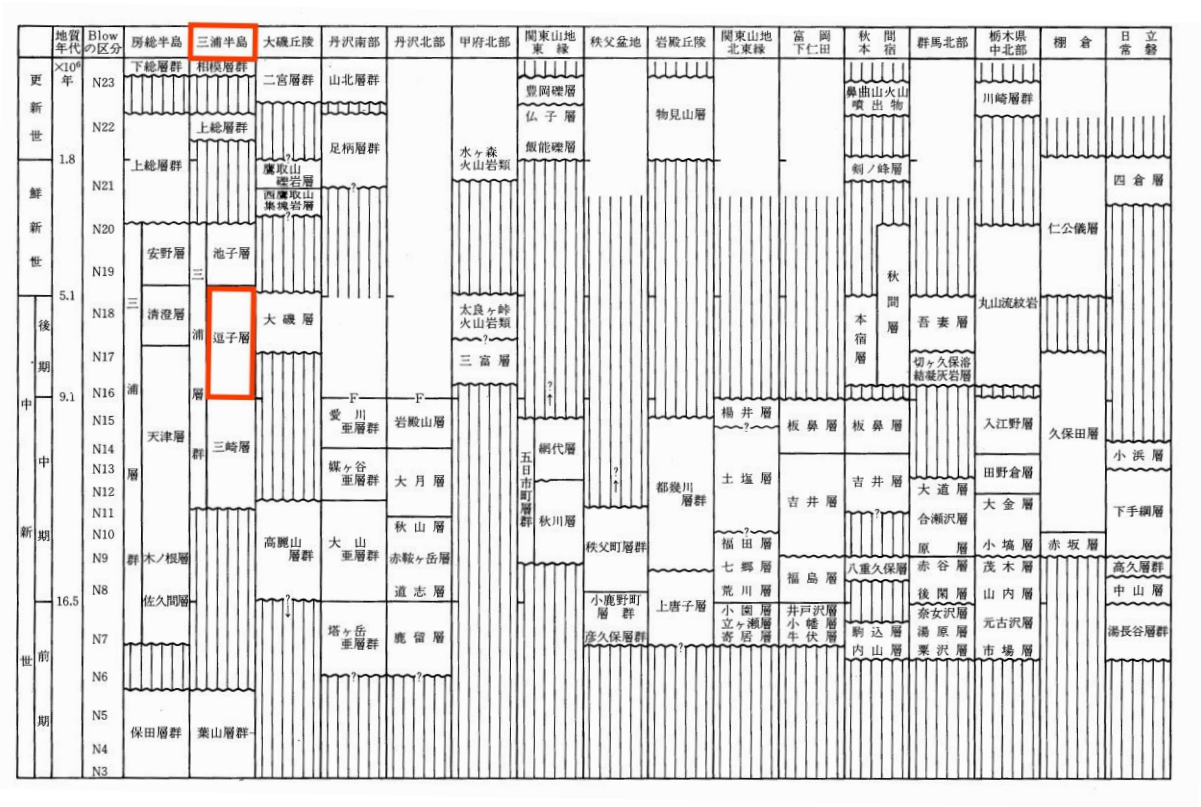
3　地質概要

表 3.1 に関東地方新第三紀の層序対比表、図 3.1 に横須賀地域の模式地質断面図を示す。

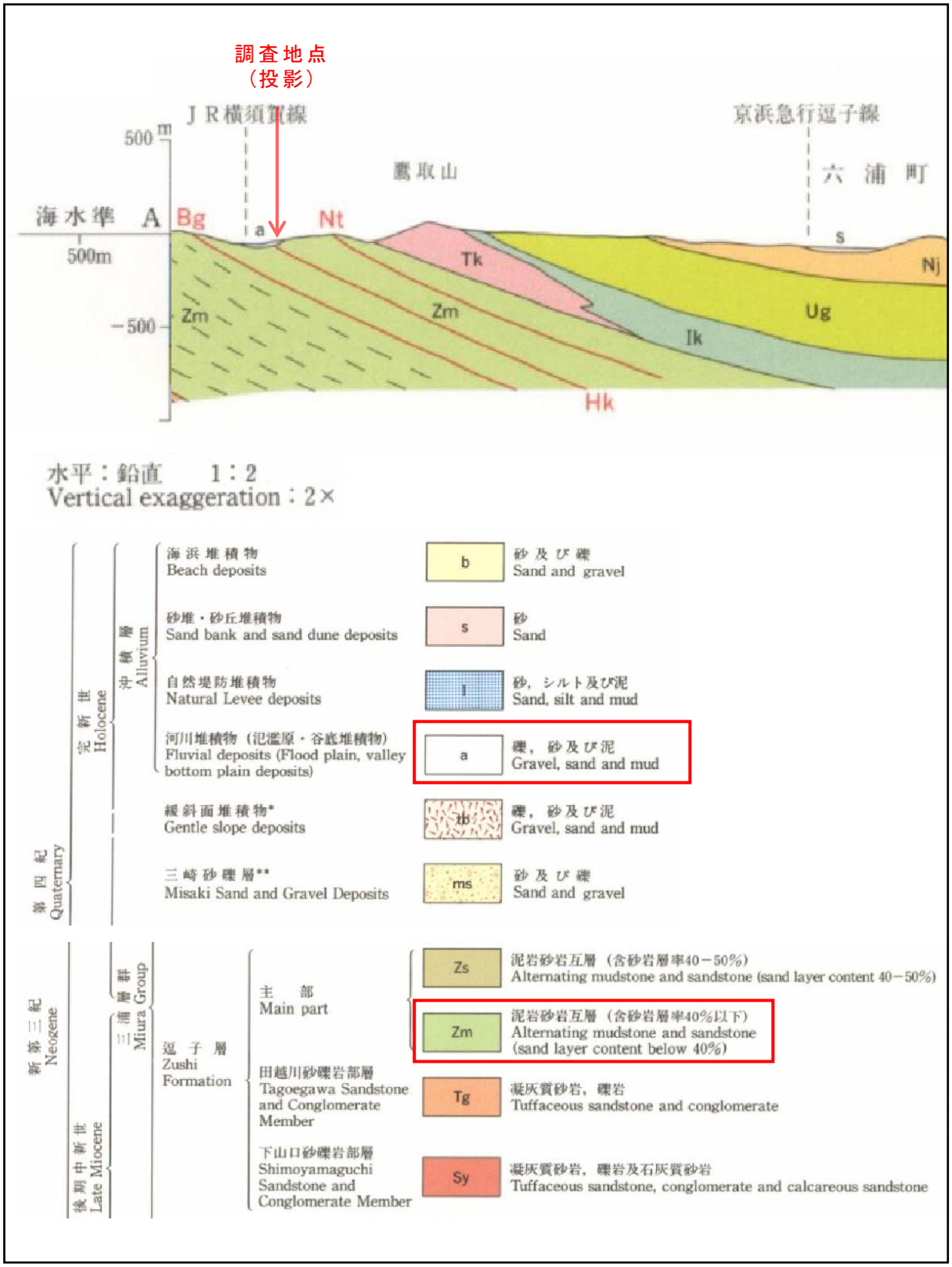
調査地点は、丘陵地を開析した谷部に位置していることから、表層は切盛造成による埋土及び沖積層が堆積している。その下位には基盤である新第三紀後期中新世の「三浦層群（逗子層）」へと続く層序が形成されている。

図 3.1 によれば、逗子層は泥岩を主体としている。

表 3.1　関東地方新第三紀の層序対比表



出典：「日本の地質 3 関東地方」共立出版，1999，P81 より引用加筆



出典：「横須賀地域の地質図」産業技術総合研究所，1998 より引用加筆

図 3.1　横須賀地域の模式地質断面図

4　調査・試験方法

⑴　機械ボーリング調査

ア　調査目的

機械ボーリングは、地層構成を把握するとともに、原位置試験やサンプリングを行うための試験孔を削孔することを目的として実施した。

イ　ボーリング位置・孔口標高

本調査は、巻末資料調査地点位置図に示す3か所で実施した。

調査数量は表4.1のとおりである。

また、調査地点の地盤高は、調査地にある「集水桝中央（巻末資料調査地点位置図と現場記録写真参照）KBM:H＝23.965m」より、水準測量によって求めた。

表 4.1　調査数量表

				No.1	No.2	No.3	合 計
機械ボーリング	φ66mm	粘性土	m	16.10	4.80	19.75	40.65
		軟岩(泥岩)	m	4.90	5.20	5.25	15.35
	掘 進 長 合 計		m	21.00	10.00	25.00	56.00
標準貫入試験		粘性土	回	15	4	19	38
		軟岩(泥岩)	回	6	6	6	18
		合　　計	回	21	10	25	56

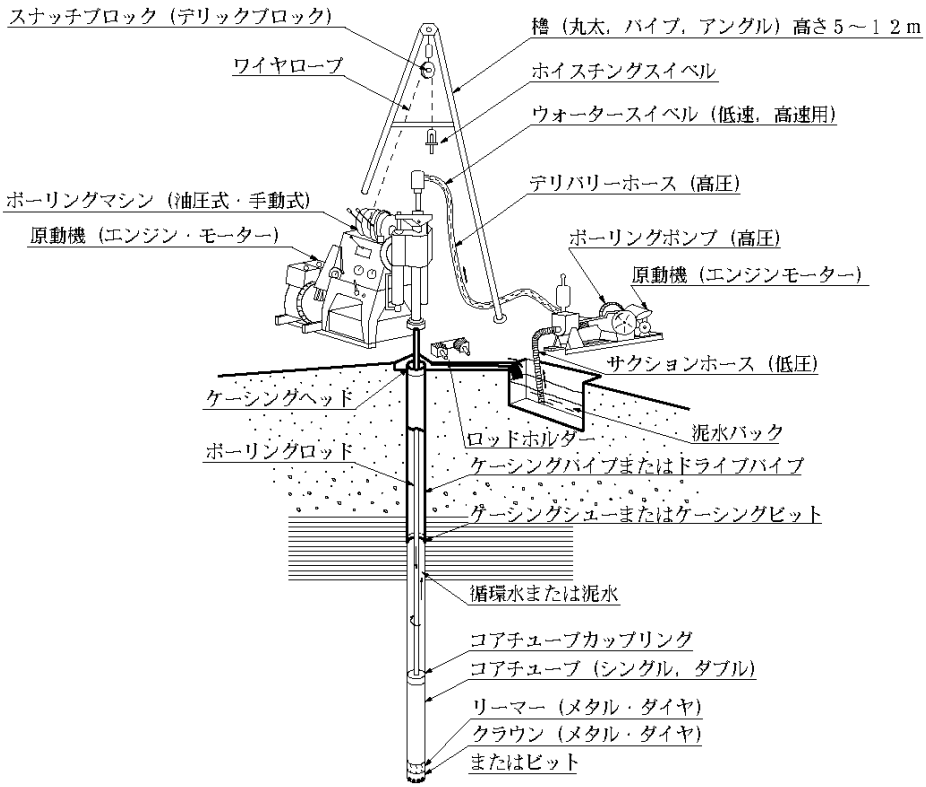
ウ　基準・規格

本調査は、(社)地盤工学会「地盤調査の方法と解説(2013)」に基づいて実施した。

エ　掘進装置

掘進機械は、ロータリー式試錐機を使用した。

ロータリー式試錐機の全体構成例を図 4.1 に示す。



出典：「地質調査報告書のまとめ方」全国地質調査業協会連合会，2002，付録CD

図 4.1 ロータリー式試錐機の全体構成例

オ　掘進方法

(ｱ)　埋設管破損防止のため、表層のアスファルトをコアカッターにて削孔後、GL-0.90mまで人力による試掘を実施した。

(ｲ)　掘進孔径は、原位置試験やサンプリングに合わせてφ66mmとした。

(ｳ)　掘進にあたっては、地下水位確認までは原則無水掘りとし、以深は保孔およびスライム除去のため、ベントナイト泥水を用いて泥水循環方式とした。また、孔壁の保護を目的としてケーシングを適宜挿入した。

(ｴ)　掘進に際しては、次の点に注意して現場野帳に記載し、柱状図作成のための資料とした。

a　薄層に十分注意し、層構成の特徴を把握する。

b　層相の特徴として、土質、色調、締まり具合または硬軟、含水の多少、粒子形状、混入物の有無と種類等を観察する。

c　湧水、逸水の有無を確認する。

(ｵ)　調査終了後は発生土にて調査孔を充填、表層を常温合材で閉塞した。

カ　掘止め基準

今回の調査では、「N値50以上層厚5m以上」の土層を確認して掘止めとした。

⑵　標準貫入試験(SPT)

ア　試験目的

標準貫入試験は、粘性土の硬軟、砂質土の締まり具合の指標となる。

N値を求めるとともに、土質判定のための試料を得ることを目的として実施した。

イ　基準・規格

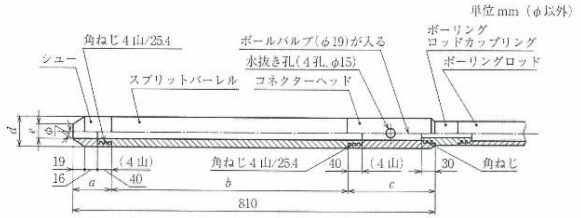
本試験は、日本産業規格「土の標準貫入試験方法(JIS A 1219:2013)」に基づき実施した。

ウ　試験装置

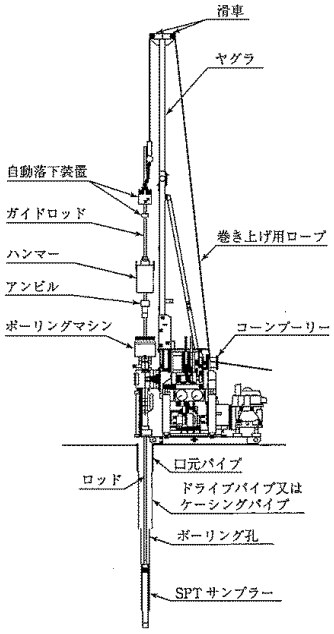
標準貫入試験用具及び全体図を表 4.2 に示す。ハンマーの落下は自動落下方式とし、半自動落下装置を使用した。

表 4.2　標準貫入試験用具

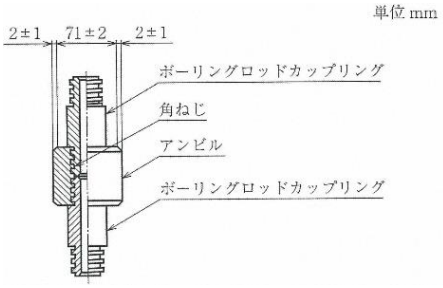
器具名	仕様
標準貫入試験器	SPT サンプラー：内径 φ35±1.0 ㎜、ハンマー：重量 63.5±0.5 kg 落下装置：半自動落下方式



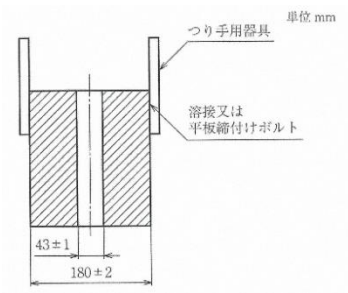
SPT サンプラーの標準形状



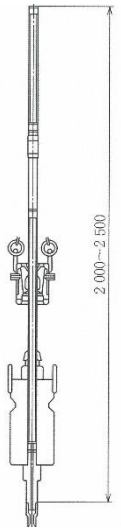
標準貫入試験全体図



アンビルの標準形状



ハンマーの標準形状



半自動落下装置

出典:「地盤調査の方法と解説」(社)地盤工学会，2013，P284～P286.P295

エ　試験方法

(ｱ)　試験は深度方向 1m 毎に実施した。

(ｲ)　スライムを除去したボーリング孔内に標準貫入試験用サンプラーをボーリングロッドに接続して静かに降ろす。150mm 予備打ちを行った後、質量 63.5±0.5kg のハンマーを 760±10mm の高さから自由落下させてサンプラーを打ち込み、300mm の貫入に要する打撃数を数えて*N*値とした。

(ｳ)　打撃数は 60 回を限度とし、60 回の打撃で貫入量が 300mm に満たない場合には、その貫入量を記録した。

(ｴ)　試験で採取した試料は、観察を行った後、標本ビンに入れ標本として提出した。

(ｵ)　機械ボーリングと標準貫入試験の結果は、巻末資料の「ボーリング柱状図」に整理してとりまとめた。

(ｶ)　*N*値の評価方法を表 4.3、表 4.4 に示す。

表 4.3　*N*値と砂の相対密度の関係（Terzaghi and Peck）

*N*値	相対密度 (Terzaghi・Peck)	現場判別法
0～4	非常に緩い (very loose)	鉄筋が容易に手で貫入
4～10	緩　　い (loose)	ショベル（スコップ）で掘削可能
10～30	中　位　の (medium)	鉄筋を 5 ポンドハンマで打ち込み容易
30～50	密　　な (dense)	同上、30cm 程度貫入
>50	非常に密な (very dense)	同上、5～6cm 貫入、掘削につるはし必要、打込み時金属音

出典：「地盤調査の方法と解説」(社)地盤工学会，2013，P305

表 4.4　*N*値と粘土のコンシステンシー、一軸圧縮強さの関係
（Terzaghi and Peck）

*N*値	q_u (kN/m^2)	コンシステンシー
0～2	0.0～24.5	非常に軟らかい
2～4	24.5～49.1	軟らかい
4～8	49.1～98.1	中位の
8～15	98.1～196.2	硬い
15～30	196.2～392.4	非常に硬い
30～	392.4～	固結した

出典：「地盤調査の方法と解説」(社)地盤工学会，2013，P308

5　ボーリング調査結果

機械ボーリング調査結果は、巻末資料ボーリング柱状図のとおりである。表 5.1 には地質層序表を、図 5.1 には地層推定断面図を示す。

⑴　調査地点の地質構成、層相及び特徴

今回の調査で確認した最大深度 25m までの地層は、表層部の埋土(B)を除けば、沖積層と三浦層群―逗子層（新第三紀層）に分けられる。

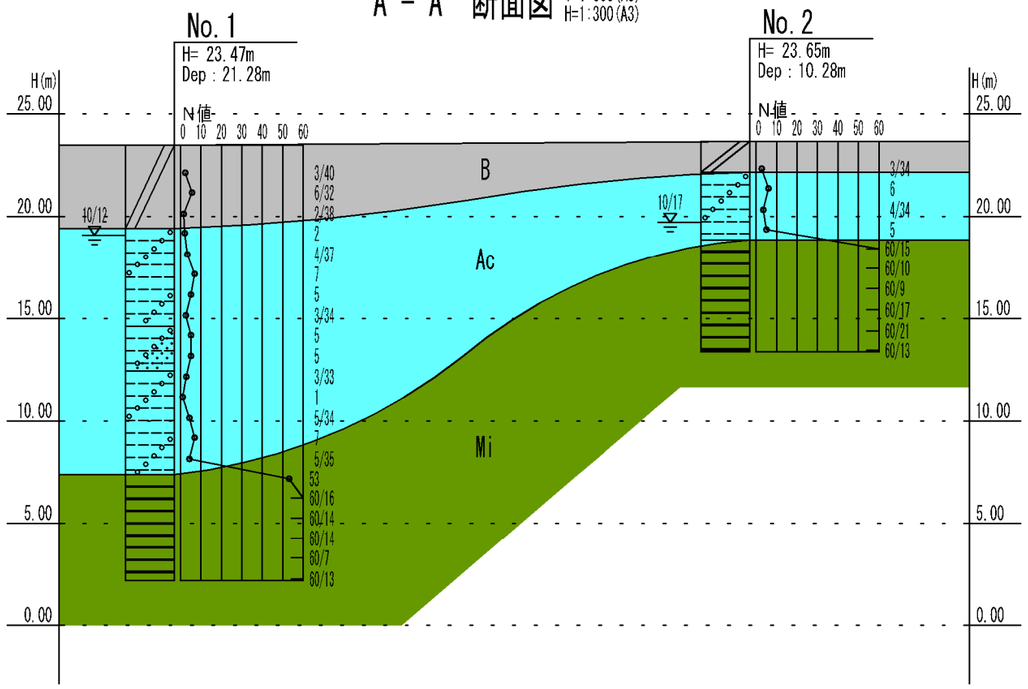
沖積層は、新生代・第四紀完新世の堆積物であり、谷底に堆積した粘性土(Ac)より成る。三浦層群―逗子層は新第三紀後期中新世の堆積物であり、泥岩(Mi)より成る。沖積層と三浦層群―逗子層の層境は GL-4.80～-19.75m(H+4.05～+18.85m)であり、今回調査した地点間で考慮すると西側に傾斜している。

表 5.1　地質層序表

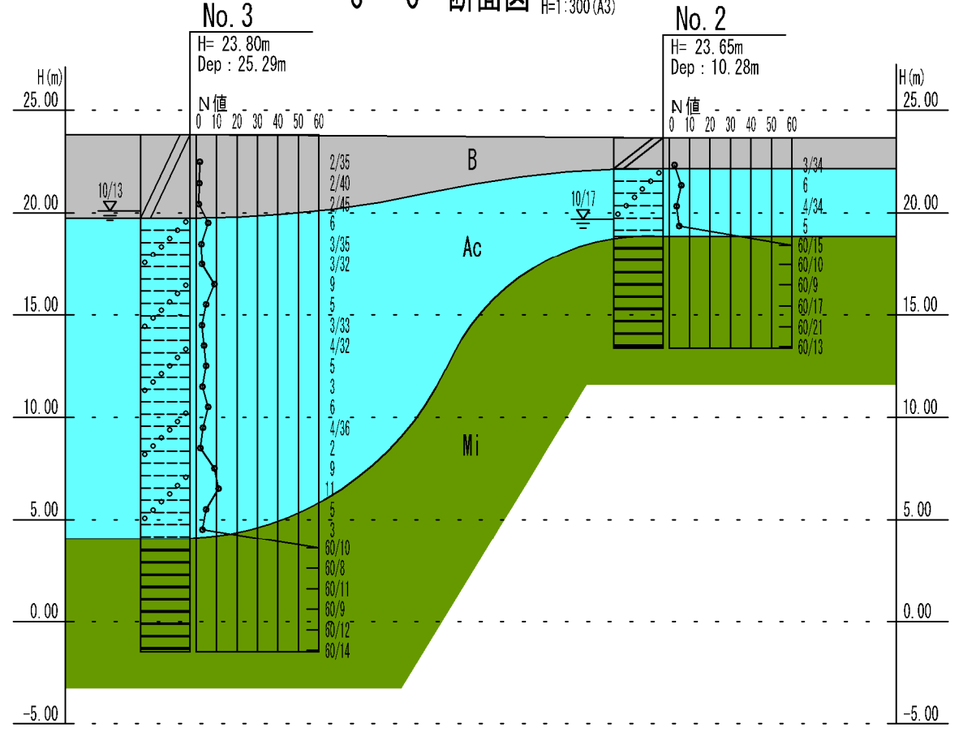
時代		地層名		記号	主要土質	層厚	N 値 (平均 N 値)	備考
新生代・第四紀	現代	埋土		B	ガラ混り粘性土	1.50～4.05m	1.3～5.6 (2.4)	表層部はアスファルト、コンクリート、砕石である。以深、不均質な粘性土主体で、煉瓦片や陶器片などが混入する。
	完新世	沖積層	粘性土層	Ac	礫混りシルト	3.30～15.70m	1.0～11.0 (4.6)	礫は固結シルト片である。 一部、送泥水が逃水する。 所々、半固結状を呈す。
新第三紀	後期中新世	三浦層群―逗子層	泥岩層	Mi	泥岩	5.18m以上	53.0～60.0 (59.6)	短柱状コアで採取される。 硬質である。

※N値の上限は60とする。

A－A’ 断面図 V=1:300(A3) H=1:300(A3)



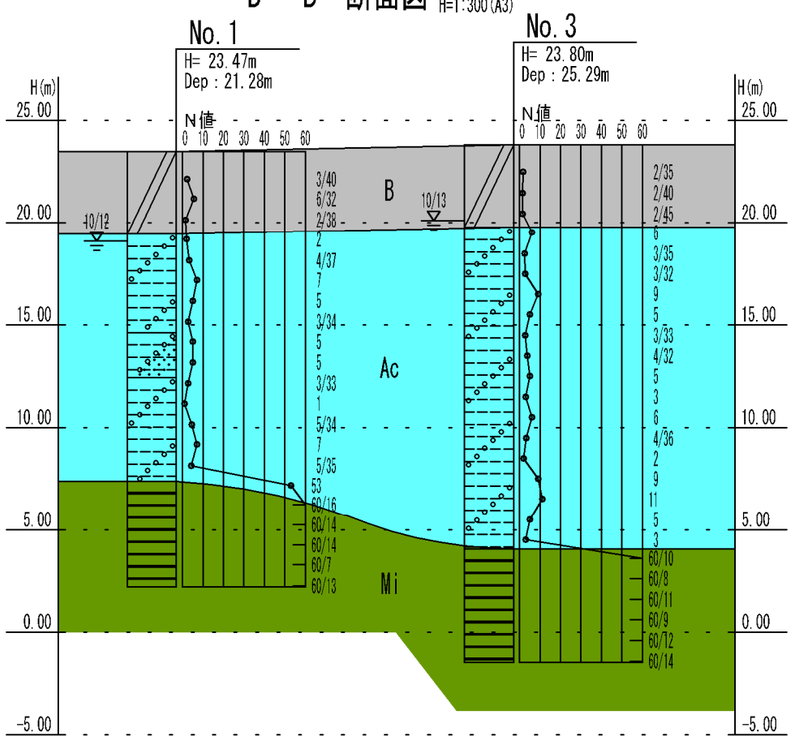
C－C’ 断面図 V=1:300(A3) H=1:300(A3)



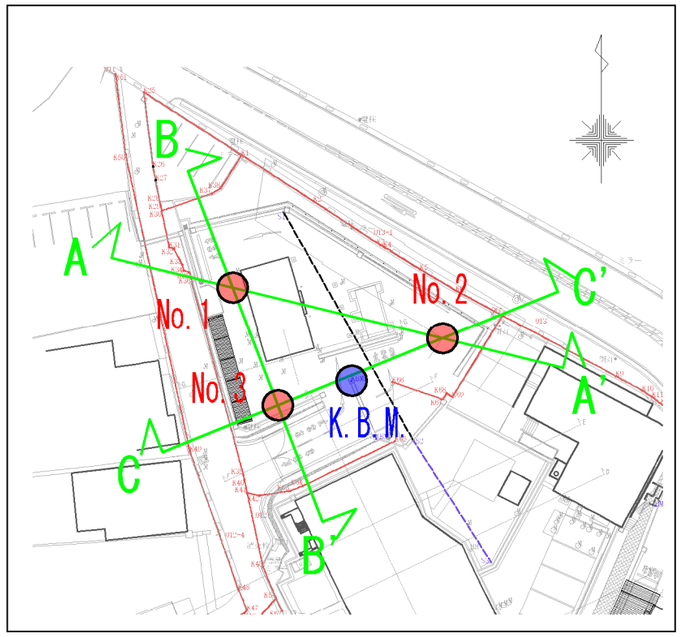
凡　例

孔内水位

B－B’ 断面図 V=1:300(A3) H=1:300(A3)



断面方向線図 S=1:800



・・・今回調査位置
・・・KBM
・・・断面方向線

地　質　層　序　表

時代		地層名		記号	主要土質	層厚	N値（平均N値）	備考
新生代・第四紀	現代	埋土		B	ガラ混り粘性土	1.50～4.05m	1.3～5.6 (2.4)	表層部はアスファルト、コンクリート、砕石である。以深、不均質な粘性土主体で、煉瓦片や陶器片などが混入する。
	完新世	沖積層	粘性土層	Ac	礫混りシルト	3.30～15.70m	1.0～11.0 (4.6)	礫は固結シルト片である。一部、送泥水が逸水する。所々、半固結状を呈す。
新第三紀	中新世	三浦層群	泥岩層	Mi	泥岩	5.18m以上	53.0～60.0 (59.6)	短柱状コアで採取される。硬質である。

※N値の上限は60とする。

調査件名	鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託（地質調査業務）		
図面名	地層推定断面図	縮　尺	図　示

図5.1　地層推定断面図

⑵　各層の分布状況、土性特徴及びN値傾向

ア　埋土(B)

表層を覆う埋土で、層厚1.50～4.05mを確認した。

表層アスファルトやコンクリート、砕石である。以深は、不均質な粘性土主体で、煉瓦片や陶器片などが混入する（写真 5.1参照）。

N値は1.3～5.6(平均2.4)を示す。

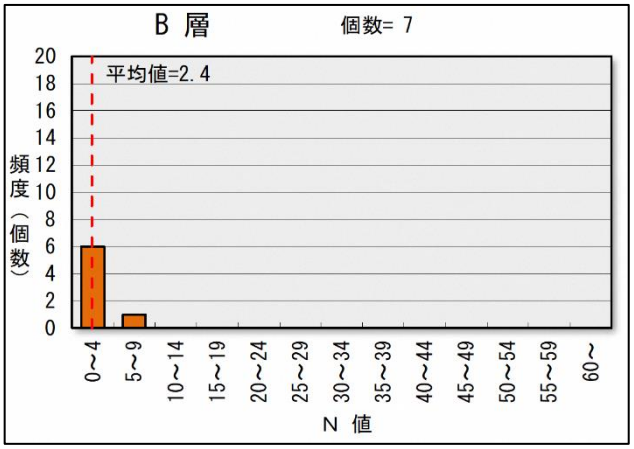


図 5.2　埋土(B)のN値傾向

写真 5.1　No.1 地点において試掘で確認されたガラ

【沖積層】

イ　粘性土層(Ac)

GL-1.50 ～ 4.05m(H+19.42～+22.15m)より分布する。

層厚 3.30～15.70m を確認した。土質は礫混りシルトからなり、礫は固結シルト片である。一部、送泥水が逃水する。所々、半固結状を呈す。

N値は 1.0～11.0（平均4.6）を示す。

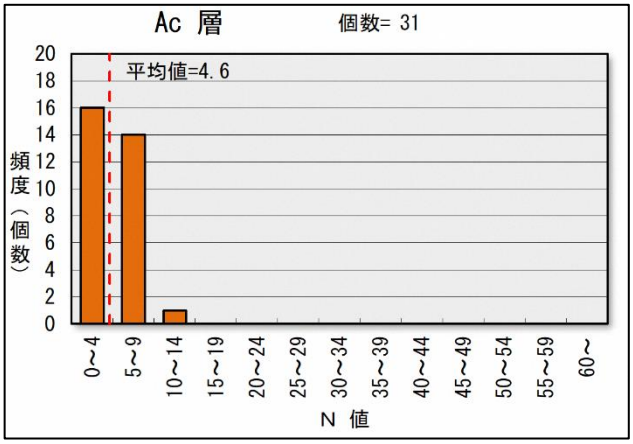


図 5.3　粘性土層(Ac)のN値傾向

【三浦層群―逗子層】

ウ　泥岩層(Mi)

付近一帯の基盤となる地層であり、層厚 5.18m 以上を確認した。分布上面深度（標高）は GL-4.80～-19.75m(H+4.05 ～ +18.85m)であり、西側に著しく傾斜している。土質は泥岩からなり、短柱状コアで採取される。

*N*値 53.0～60.0（平均 59.6）を示し、硬質である。

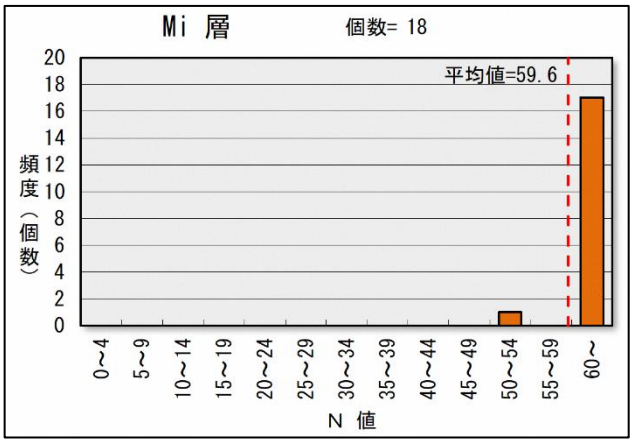


図 5.4　泥岩層(Mi)の *N*値傾向

⑶　地下水

調査地点において無水掘りで確認した地下水位を表 5.2 に整理した。

この地下水位は、埋土(B)と粘性土層(Ac)で確認されている。難透水層である粘性土中で確認された地下水位であり、雨水等が溜まった「溜まり水（宙水)」の可能性もあるが、沖積層を帯水層とする付近一帯の自由地下水位と考えるのが、妥当である。

表 5.2　地下水状況

地点	観測位置		地層	観測日	備考
	GL(m)	H(m)			
No.1	-4.40	19.07	Ac	令和 4 年（2022 年）10 月 12 日	無水温水位
No.2	-3.95	19.70	Ac	令和 4 年（2022 年）10 月 17 日	無水温水位
No.3	-3.71	20.09	B	令和 4 年（2022 年）10 月 13 日	無水温水位

6　考察

建造物の基礎工は、荷重度、経済性、施工性、施工条件（周辺環境）などを比較検討する必要があり一概に決められないが、今回調査結果をもとに、次のとおり計画建造物の基礎工について所見を述べる。

⑴　支持層の選定

一般的な構造物の場合、支持層とは基礎からの上載荷重に対して、十分な許容支持力と厚さを有し、構造物に有害な変形を与える圧密沈下などが生じない良質な地盤をいう。計画建造物の規模にもよるが、一般に良好な支持層の目安としては層厚 3～5m 以上、N値 30 以上であり、重量構造物の場合には N値 50 以上が確実な支持層とされている。図 6.1 には、敷地内東から西にかけての地層推定横断図を示す。

上記の観点からすると、調査地においては Mi 層が支持層として期待できる。

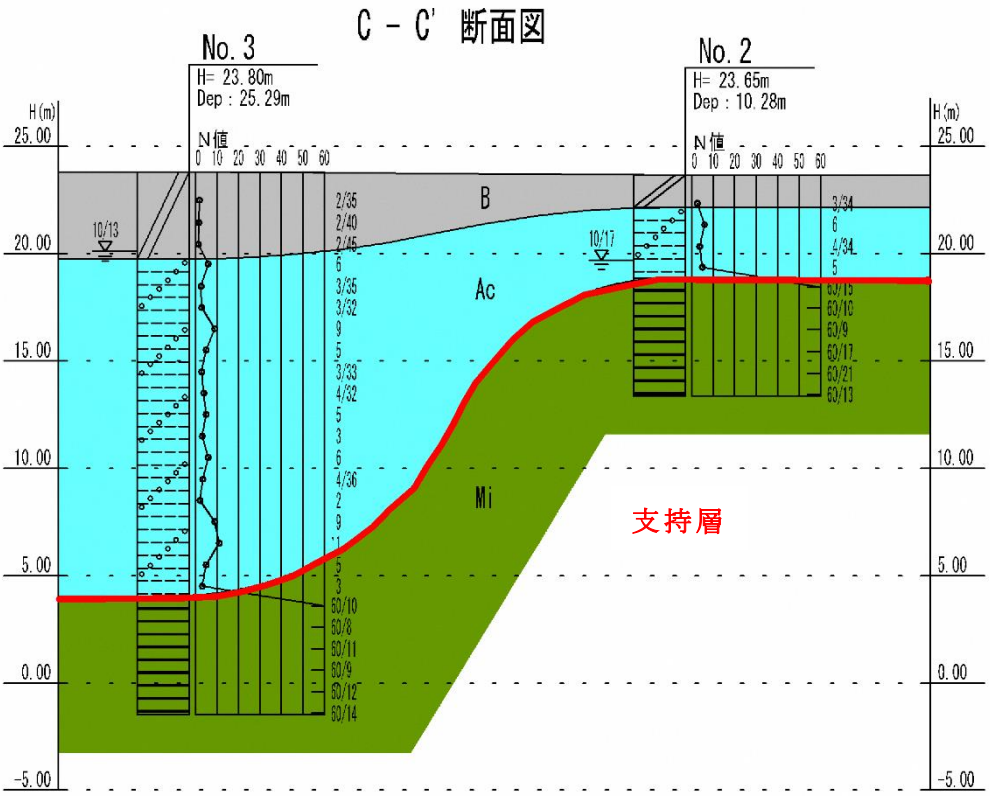


図 6.1　東西方向の地層推定断面図（縮尺フリー）

⑵　調査地点における支持層の想定等高線

図 6.2 に支持層（Mi 層）上面標高の想定される等高線図を示す。

この図は、既存のボーリング調査結果※や旧地形を読み取り作成した想定の等高線図である。

Mi 層の分布上面標高は既存ボーリング調査結果も含めて H＝4.05～22.91m に見られ、敷地南部から北西方向に谷が形成されていることが想定される。

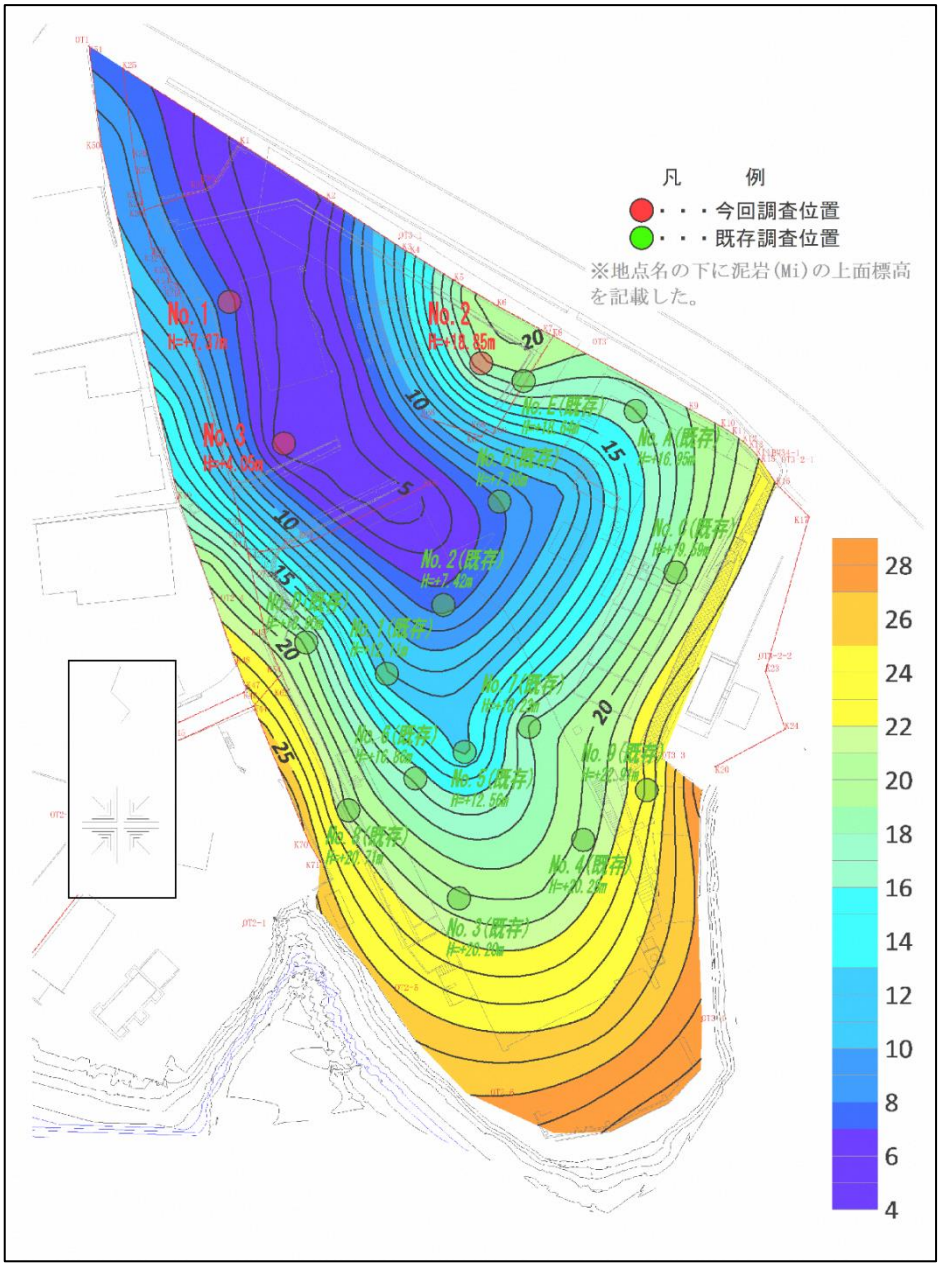


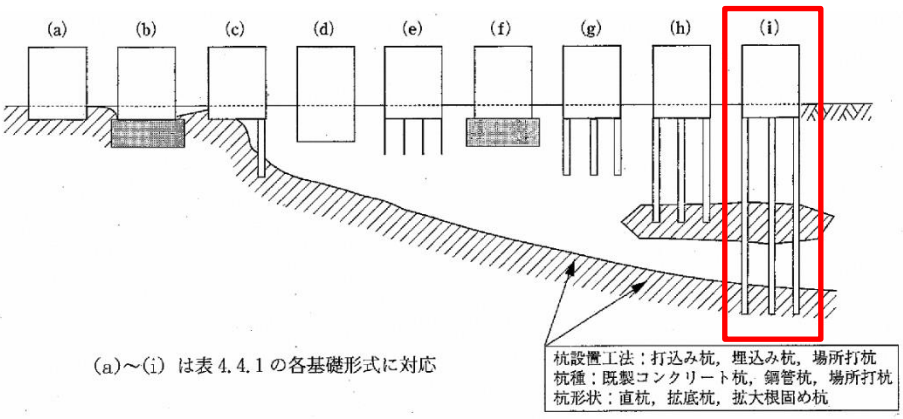
図 6.2　支持層(Mi 層)の想定等高線図（縮尺フリー）

※参考とした既存ボーリングは、①鎌倉市名越塵芥焼却場建設工事に伴う測量及び地質調査工事（昭和 40 年　京浜調査工事株式会社）、②名越清掃工場地質調査（昭和 53 年　第一開発株式会社）

⑶　予定建築物の基礎形式について

図 6.3 は「建築基礎構造設計指針」に示されている支持地盤の深度と基礎形式である。

一般に良好な支持層の目安はＮ値 30 以上の地盤であり、荷重規模が大きい場合にはＮ値 50 以上が求められる。また、層厚も十分な厚さ（一般には 5m 以上）が必要である。上記の観点からすると Mi 層は 50 以上の安定した N 値を示している。したがって、図中の「(i)杭基礎(支持杭)」となるが、支持層や基礎形式は、計画建造物の荷重度、経済性、施工性、施工条件(周辺環境)などを比較検討して決定する必要がある。



支持地盤の深度と適用可能な基礎形式

基礎形式ごとの検討事項・チェック事項一覧

基礎形式	基礎部材	検　討　事　項	本文該当節
(a) 直接基礎	基礎スラブ／べた基礎・布基礎・独立基礎等	地盤の鉛直支持力，滑動抵抗力，浮上がり抵抗力 即時沈下，圧密沈下 凍結震度，地下水位	5 章
(b) 直接基礎＋地盤改良工法（ラップルコンクリート地業を含む）	同上＋改良体，改良地盤	改良地盤の鉛直（水平）支持力，改良地盤の滑動抵抗力，支持地盤の鉛直支持力 即時沈下，圧密沈下 改良体の設計基準強度，発生（圧縮・せん断）応力度	4.8 5.5 9.4
(c) 併用基礎（異種基礎）	基礎スラブ，改良体，改良地盤，杭基礎（摩擦杭，中間支持層への支持杭，支持杭）	直接基礎，地盤改良工法，杭基礎の該当欄のほか，傾斜地盤の鉛直支持力，境界部応力，基礎のねじれ	7.2
(d) フローティング基礎	基礎スラブ	直接基礎の項のほか，排土重量，地中応力など	
(e) 併用基礎（パイルド・ラフト基礎）	べた基礎，摩擦杭	同上＋平均鉛直ばね定数，ラフトの相対剛性	7.3
(f) 直接基礎＋地盤改良工法	同上＋改良体，改良地盤	(b) 直接基礎＋地盤改良工法の検討事項＋層状地盤の鉛直支持 力	4.8 5.5 9.4
(g) 杭基礎（摩擦杭）	パイルキャップ，杭頭接合部各種の杭種，杭工法	杭の鉛直支持力，引抜き抵抗力，水平抵抗力 群杭効率，負の摩擦力，地盤変位を考慮した耐震設計，液状化地盤の水平抵抗，傾斜地盤の鉛直支持力・水平抵抗力 杭基礎の即時沈下，圧密沈下，基礎の変形角・傾斜角 杭体（圧縮，曲げ，せん断）耐力，杭頭接合部耐力	6 章
(h) 杭基礎（中間支持層への支持杭）	同上		
(i) 杭基礎（支持杭）	同上		

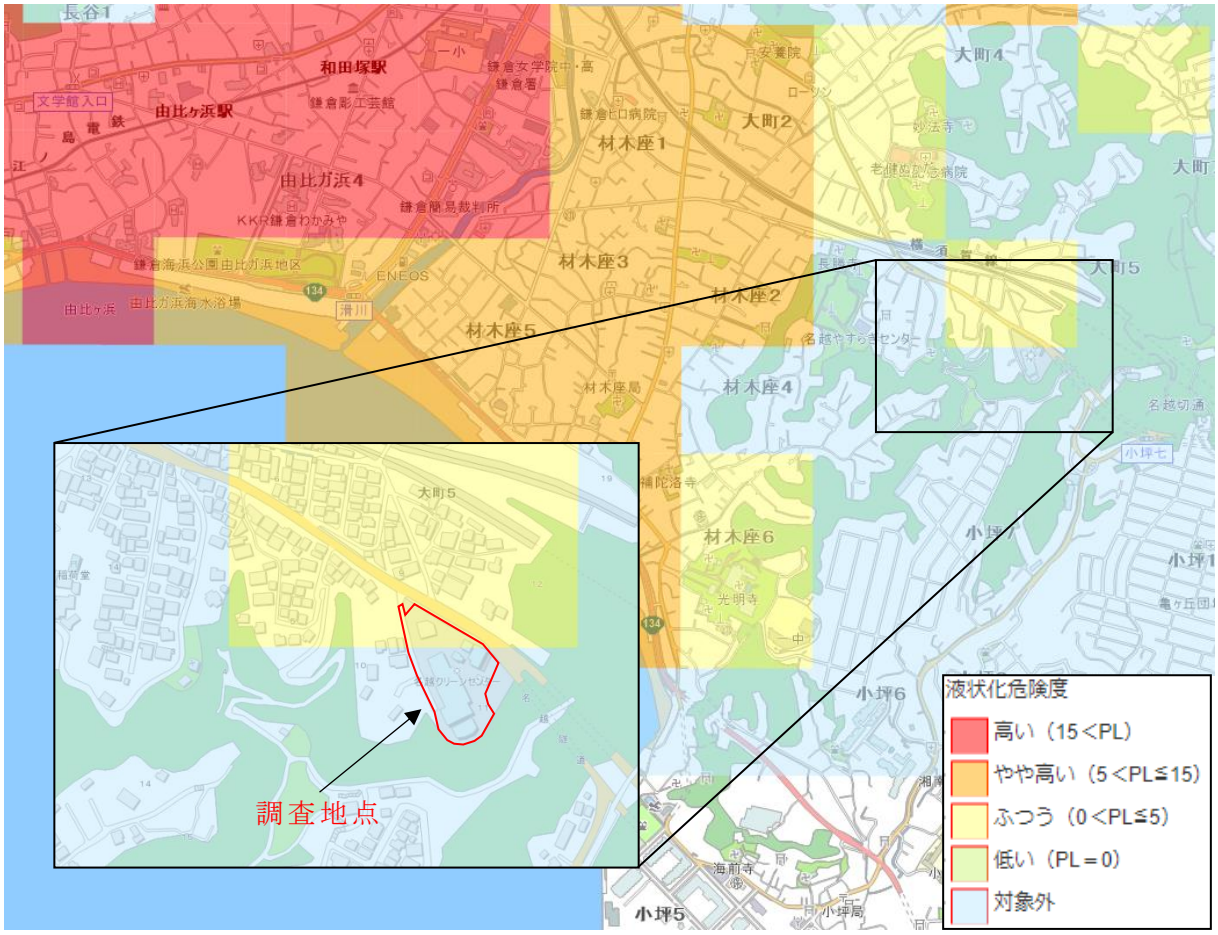
出典：「建築基礎構造設計指針 2019,11」(社)日本建築学会，P35

図 6.3　支持地盤の深度と適用可能な基礎形式

7　液状化危険度

鎌倉市における地震防災情報マップを図 7.1 に示す。

この予想図は、神奈川県が平成 27 年 3 月に公表した県内に一律のマグニチュード 6.8 が発生した場合の液状化の可能性を示したものである。調査地点付近は「液状化危険度は 0＜PL≦5～対象外」に位置しており、液状化危険度は比較的低いことを示している。これは、調査地点に緩い砂層が分布していないことが要因として考えられる。



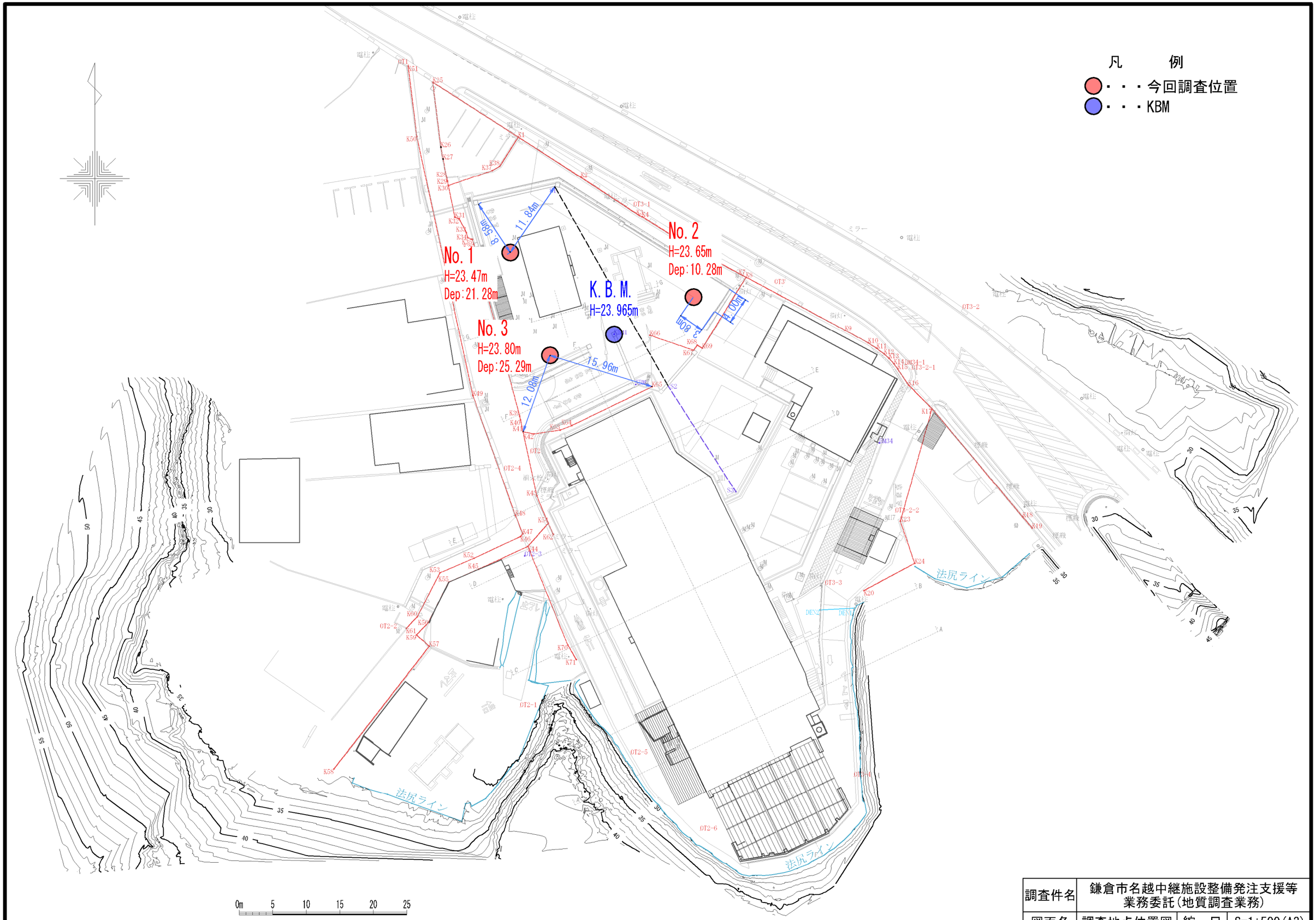
出典：「鎌倉市地震防災情報マップ」鎌倉市ホームページより引用・加筆

図 7.1　鎌倉市地震防災情報マップ

＜巻末資料＞

巻末資料 1

調査地点位置図



調査件名	鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託(地質調査業務)		
図面名	調査地点位置図	縮　尺	S=1:500(A3)

巻末資料２

ボーリング柱状図

ボーリング柱状図

調　査　名　　鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託(地質調査業務)

事業・工事名

ボーリングNo.	5	2	3	9	7	4	6	4	0	0	1

シートNo.

ボーリング名	No.1	調査位置	神奈川県鎌倉市大町5-11-16(名越クリーンセンター)			北　緯	35°18'30.53"
発注機関	中外テクノス株式会社 関西支社			調査期間	令和4年10月11日～令和4年10月13日	東　経	139°33'39.74"
調査業者名	株式会社東建ジオテック Tel 048-824-9993	照査技術者	[redacted]	担当技術者	[redacted]	コア鑑定者	[redacted]	ボーリング責任者	[redacted]
孔口標高	H=23.47m	角度	180° 上 90° 下 0° 0°	方向	北 0° 270° 西 90° 東 180° 南	地盤勾配	0° 鉛直 水平 0° 90°	使用機種	試錐機: TOHO DO-D / ハンマー落下用具: 半自動落下装置
総掘進長	21.00m								エンジン: YANMER NFD10 / ポンプ: KANO V6-B

標尺 (m)	標高 (m)	層厚 (m)	深度 (m)	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
1									0.08mまでアスファルト. 0.08～0.20m, 砕石. 以深, ガラ混り砂質粘土. 煉瓦片, 陶器片, 風化岩が多量混入する. 3m付近, φ20mm程の礫が混入する.
2									
3						暗灰～暗茶褐			
4	19.42	4.05	4.05		埋土				
5							非常に軟い 軟らかい		礫は固結シルト片である. 送泥水が若干逃水する. 色調不規則である. 不均質である.
6									
7						暗灰～緑灰～暗茶灰	中位		5m付近, 含水多い. 6～7m, 若干固結状を呈す. 8m付近, 有機物が少量混入する.
8							軟らかい		
	14.62	4.80	8.85		礫混りシルト				
9									礫は固結シルト片である. 細砂が不規則に混入する. 送泥水が若干逃水する. 不均質である.
10							中位		
11	12.42	2.20	11.05		礫混り砂質シルト	緑灰			10m付近, 腐植物を含む.
12							軟らかい 非常に軟い		礫は固結シルト片である. 所々細砂が若干混入する. 送泥水が所々多量に逃水する. 不均質である.
13									
14									11～12m, 若干有機質状で, 含水多い. 13m以深, 若干固結状を呈す. 14m付近, 有機物を含む.
15						暗茶灰～緑灰	中位		
16	7.37	5.05	16.10		礫混りシルト				
17									短柱状コアで採取される. クラックが認められる. 均質である. 硬質である.
18									
19									
20									
21	2.19	5.18	21.28		泥岩	緑灰			
22									
23									
24									
25									
26									
27									

孔内水位(m)／測定月日	深度 (m)	10cmごとの打撃回数 0～10	10～20	20～30	打撃回数／貫入量(cm)	N値 —○—
	1.15	1	1	1	3	2.3
	1.55	12	15	13	40	
	2.15	2	2	2	6	5.6
	2.47	13	11	8	32	
	3.15		1	1	2	1.6
	3.53		19	19	38	
10/12 4.40 ▽	4.15		1	1	2	2
	4.45		20		30	
	5.15	1	1	2	4	3.2
	5.52		9	18	37	
	6.15	2	3	2	7	7
	6.45				30	
	7.15	2	2	1	5	5
	7.45	8	16	6	30	
	8.15	1	1	1	3	2.6
	8.49	15		9	34	
	9.15	1	1	3	5	5
	9.45	12	7	11	30	
	10.15	1	1	3	5	5
	10.45	9	8	13	30	
	11.15	1	1	1	3	2.7
	11.48		9	14	33	
	12.15			1	1	1
	12.45			30	30	
	13.15	1	2	2	5	4.4
	13.49	8	15	11	34	
	14.15	2	3	2	7	7
	14.45				30	
	15.15	2	2	1	5	4.3
	15.50		15		35	
	16.15	9	14	30	53	53
	16.45				30	
	17.15	28	32		60	112.5
	17.31		6		16	
	18.15	37	23		60	128.6
	18.29		4		14	
	19.15	41	19		60	128.6
	19.29		4		14	
	20.15	60			60	257.1
	20.22	7			7	
	21.15	45	15		60	138.5
	21.28		3		13	

深度 (m)	試験名および結果

深度 (m)	試料番号	採取方法

室内試験	掘進月日
	10/11
	10/12
	10/13

株式会社東建ジオテック

ボーリング柱状図

調　査　名　　鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託(地質調査業務)

事業・工事名

ボーリングNo.	5	2	3	9	7	4	6	4	0	0	2

シートNo.

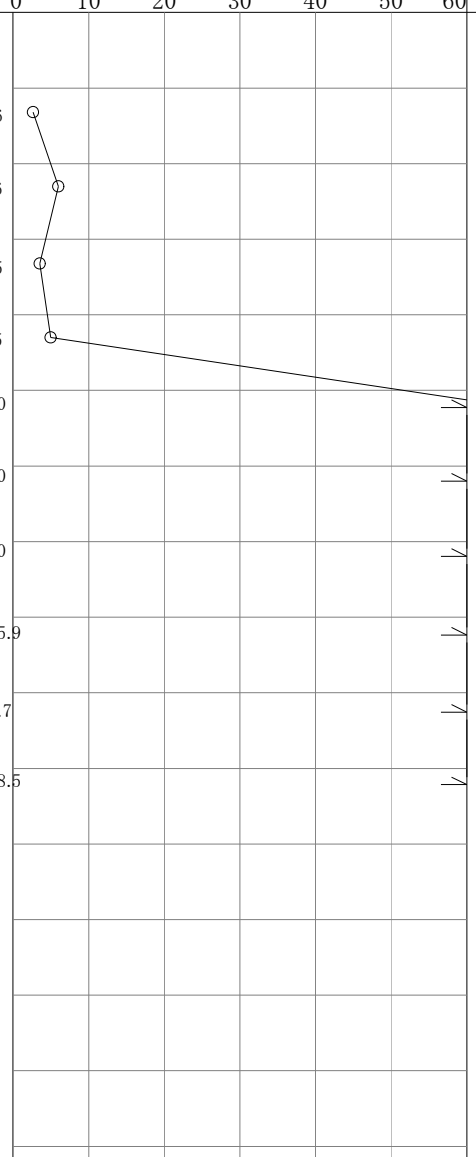
ボーリング名	No.2	調査位置	神奈川県鎌倉市大町5-11-16(名越クリーンセンター)			北　緯	35°18'30.32"
発注機関	中外テクノス株式会社 関西支社			調査期間	令和4年10月17日～令和4年10月17日	東　経	139°33'40.83"
調査業者名	株式会社東建ジオテック Tel 048-824-9993	照査技術者	[redacted]	担当技術者	[redacted]	コア鑑定者	[redacted]	ボーリング責任者	[redacted]
孔口標高	H=23.65m	角度	180° 上 90° 下 0° 0°	方向	北 0° 270° 西 90° 東 180° 南	地盤勾配	0° 鉛直 水平 0° 90°	使用機種	試錐機: TOHO DO-D / ハンマー落下用具: 半自動落下装置
総掘進長	10.00m								エンジン: YANMER NFD10 / ポンプ: KANO V6-B

標尺 (m)	標高 (m)	層厚 (m)	深度 (m)	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
1	22.15	1.50	1.50		埋土	暗灰～黄灰			0.10mまでアスファルト. 0.10～0.18m, コンクリート. 0.18～0.25m, 砕石. 以深, 礫混りシルト. 礫は風化岩である. 所々暗茶褐の粘土が混入.
2								中位	礫は固結シルト片である. 色調不規則である. 不均質である.
3								軟らかい	2～3m付近, 有機物が少量混入する. 4m付近, 若干固結状を呈す.
4	18.85	3.30	4.80		礫混りシルト	暗茶灰～黄灰		中位	
5									短柱状コアで採取される. 硬質である. 6m付近, 黄灰を呈す.
6									
7									
8									
9						緑灰～黄灰～緑灰			
10	13.37	5.48	10.28		泥岩				
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17									
18									
19									
20									
21									
22									
23									
24									
25									
26									
27									

孔内水位(m)／測定月日: 10/17 3.95

標準貫入試験

深度 (m)	10cmごとの打撃回数 0～10	10～20	20～30	打撃回数／貫入量(cm)	N値
1.15	1	1 / 12	1 / 12	3 / 34	2.6
1.49					
2.15	1	4	1	6 / 30	6
2.45					
3.15	1 / 13	1 / 9	2 / 12	4 / 34	3.5
3.49					
4.15	1	2	2	5 / 30	5
4.45					
5.15	32	28 / 5		60 / 15	120
5.30					
6.15	60			60 / 10	180
6.25					
7.15	60 / 9			60 / 9	200
7.24					
8.15	30	30 / 7		60 / 17	105.9
8.32					
9.15	22	33	5 / 1	60 / 21	85.7
9.36					
10.15	43	17 / 3		60 / 13	138.5
10.28					



原位置試験

深度 (m)	試験名および結果

試料採取

深度 (m)	試料番号	採取方法

室内試験(

掘進月日: 10/17

株式会社東建ジオテック

ボーリング柱状図

調　査　名　　鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託(地質調査業務)

事業・工事名

ボーリングNo.	5	2	3	9	7	4	6	4	0	0	3

シートNo.

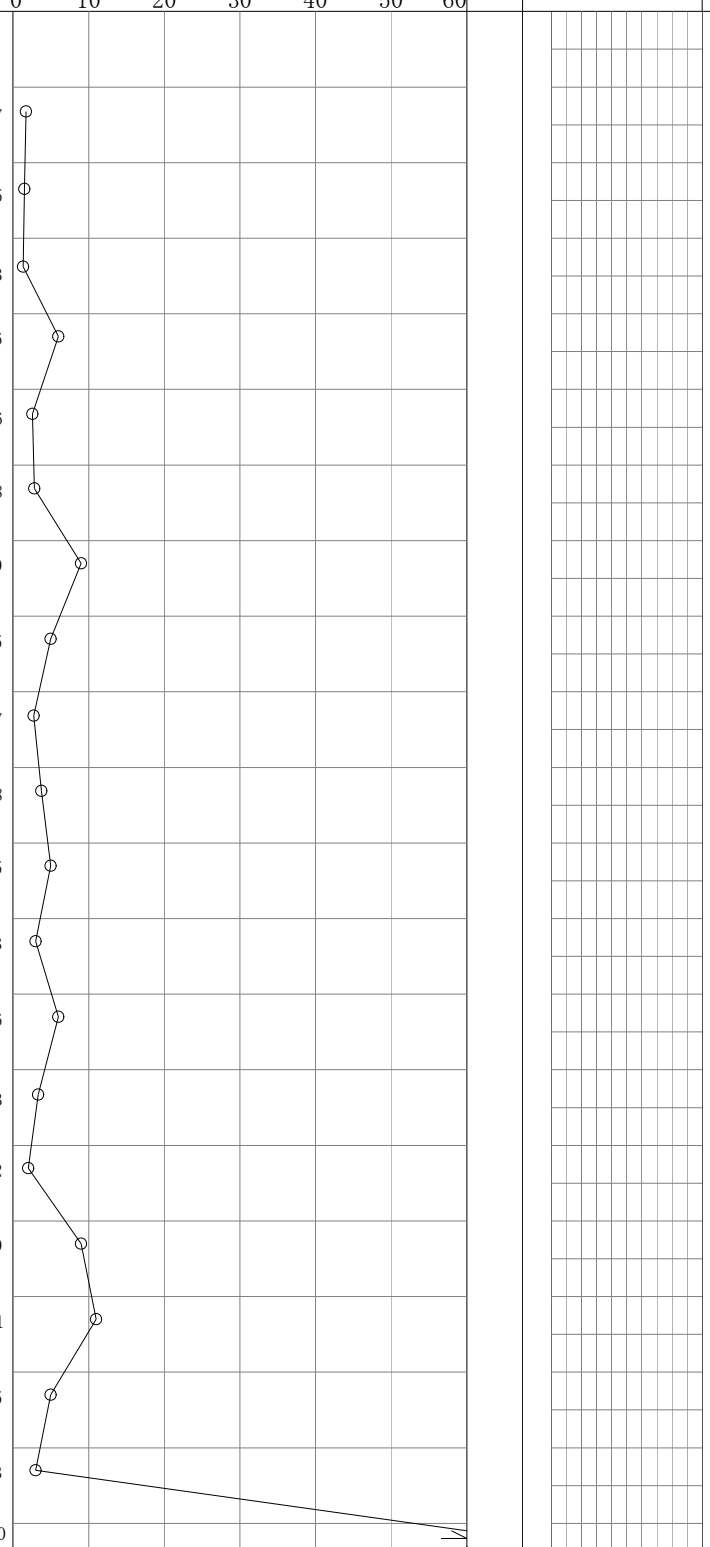
ボーリング名	No.3	調査位置	神奈川県鎌倉市大町5-11-16(名越クリーンセンター)			北　緯	35°18'30.10"
発注機関	中外テクノス株式会社 関西支社			調査期間	令和4年10月13日～令和4年10月15日	東　経	139°33'40.13"
調査業者名	株式会社東建ジオテック Tel 048-824-9993	照査技術者	[redacted]	担当技術者	[redacted]	コア鑑定者	[redacted]	ボーリング責任者	[redacted]
孔口標高	H=23.80m	角度	180° 上 90° 下 0° 0°	方向	北 0° 270° 西 90° 東 180° 南	地盤勾配	0° 鉛直 水平 0° 90°	使用機種	試錐機: TOHO DO-D / ハンマー落下用具: 半自動落下装置
総掘進長	25.00m								エンジン: YANMER NFD10 / ポンプ: KANO V6-B

標尺 (m)	標高 (m)	層厚 (m)	深度 (m)	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
	19.75	4.05	4.05		埋土	暗灰～暗茶褐			0.12mまでアスファルト. 0.12～0.25m間, 砕石. 以深, 礫・ガラ混り粘土. 陶器片・煉瓦片・木片が混入する.
	4.05	15.70	19.75		礫混りシルト	緑灰～暗茶灰～緑灰～淡茶灰～緑灰		中位 軟らかい 硬い 中位 軟らかい 中位 軟らかい 中位 軟らかい 非常に軟い 硬い 中位 軟らかい	礫は固結シルト片である. 所々, 細砂が混入する. 色調不規則である. 不均質である. 4m付近, 若干固結状を呈す. 5.80m付近, 送泥水が全量逃水する. 7m付近, 送泥水が若干逃水する. 若干固結状を呈す. 10m付近, 若干有機質状を呈す. 11m付近, 細砂が多量混入する. 12m付近, 有機質状を呈す. 13m付近, 若干固結状を呈す. 15.30m, 腐植物が混入し, 黒灰を呈す. 16～17m, 半固結状を呈す. 19m上部, 木片が混入する.
	-1.49	5.54	25.29		泥岩	緑灰			短柱状コアで採取される. 均質である. 硬質である.

孔内水位(m)／測定月日: 3.71 (10/13)

標準貫入試験

深度 (m)	10cmごとの打撃回数 0～10	10～20	20～30	打撃回数／貫入量(cm)	N値
1.15	1/16		1/19	2/35	1.7
2.15		1/27	1/13	2/40	1.5
3.15		1/25	1/20	2/45	1.3
4.15	2	2	2	6/30	6
5.15	1/15	1/12	1/8	3/35	2.6
6.15	1/12	1	1	3/32	2.8
7.15	4	3	2	9/30	9
8.15	2/12	2/12	1/6	5/30	5
9.15	1/16	1	1/7	3/33	2.7
10.15	1/7	1	2/15	4/32	3.8
11.15	1/7	2/13	2	5/30	5
12.15		1/20	2	3/30	3
13.15	2	2	2	6/30	6
14.15	1/14	1/7	2/15	4/36	3.3
15.15		1/20	1	2/30	2
16.15	3	3	3	9/30	9
17.15	4	4	3	11/30	11
18.15	1	2	2	5/30	5
19.15	1/8	1/9	1/13	3/30	3
20.15	60			60/10	180
21.15	60/8			60/8	225
22.15	53	7/1		60/11	163.6
23.15	60/9			60/9	200
24.15	48	12/2		60/12	150
25.15	43	17/4		60/14	128.6



原位置試験 深度 (m)	試験名および結果

試料採取 深度 (m)	試料番号	採取方法

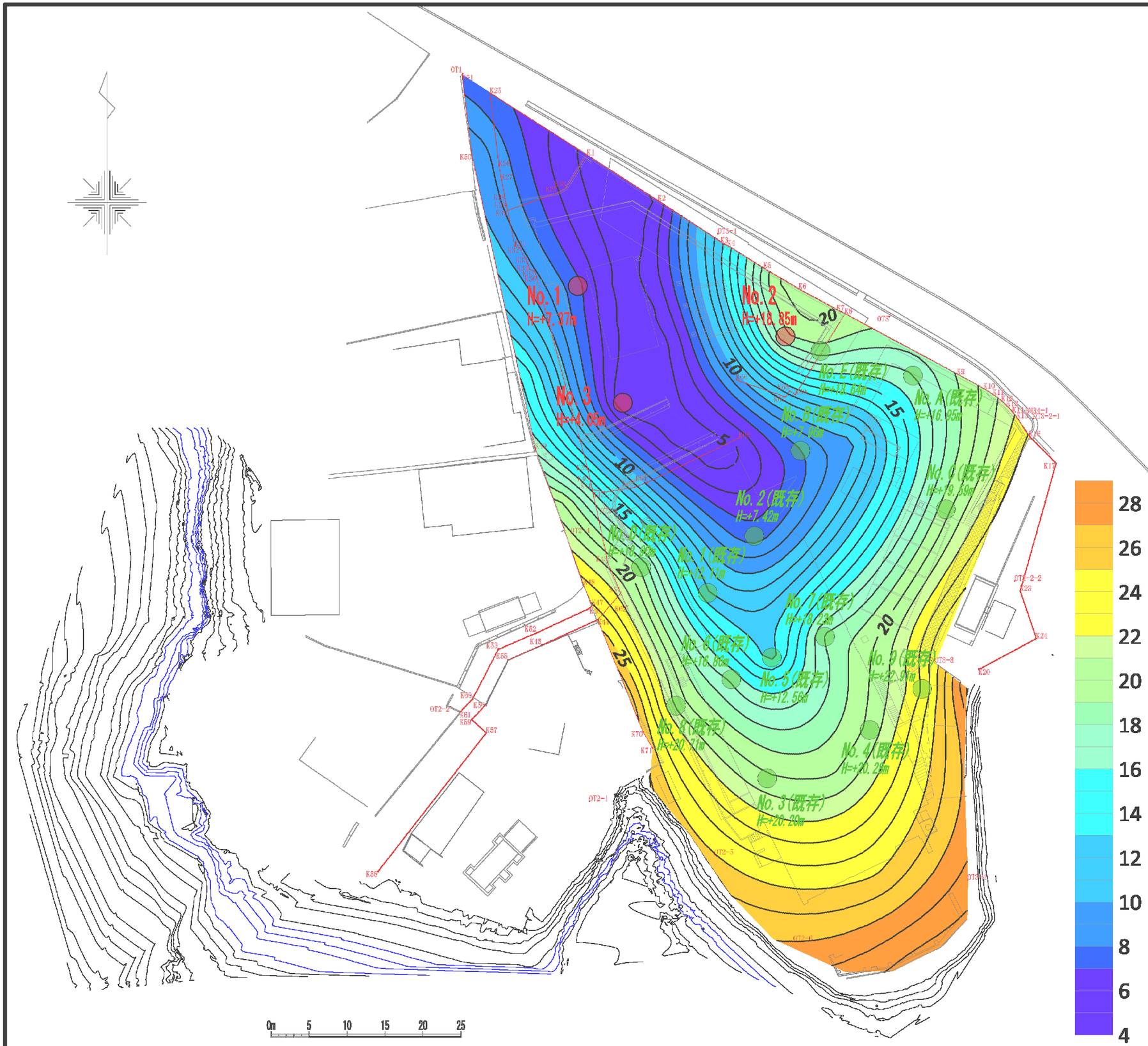
室内試験(

掘進月日: 10/13, 10/14, 10/15

株式会社東建ジオテック

巻末資料３

泥岩（土丹）の上面標高想定等高線図



凡　　例

●・・・今回調査位置

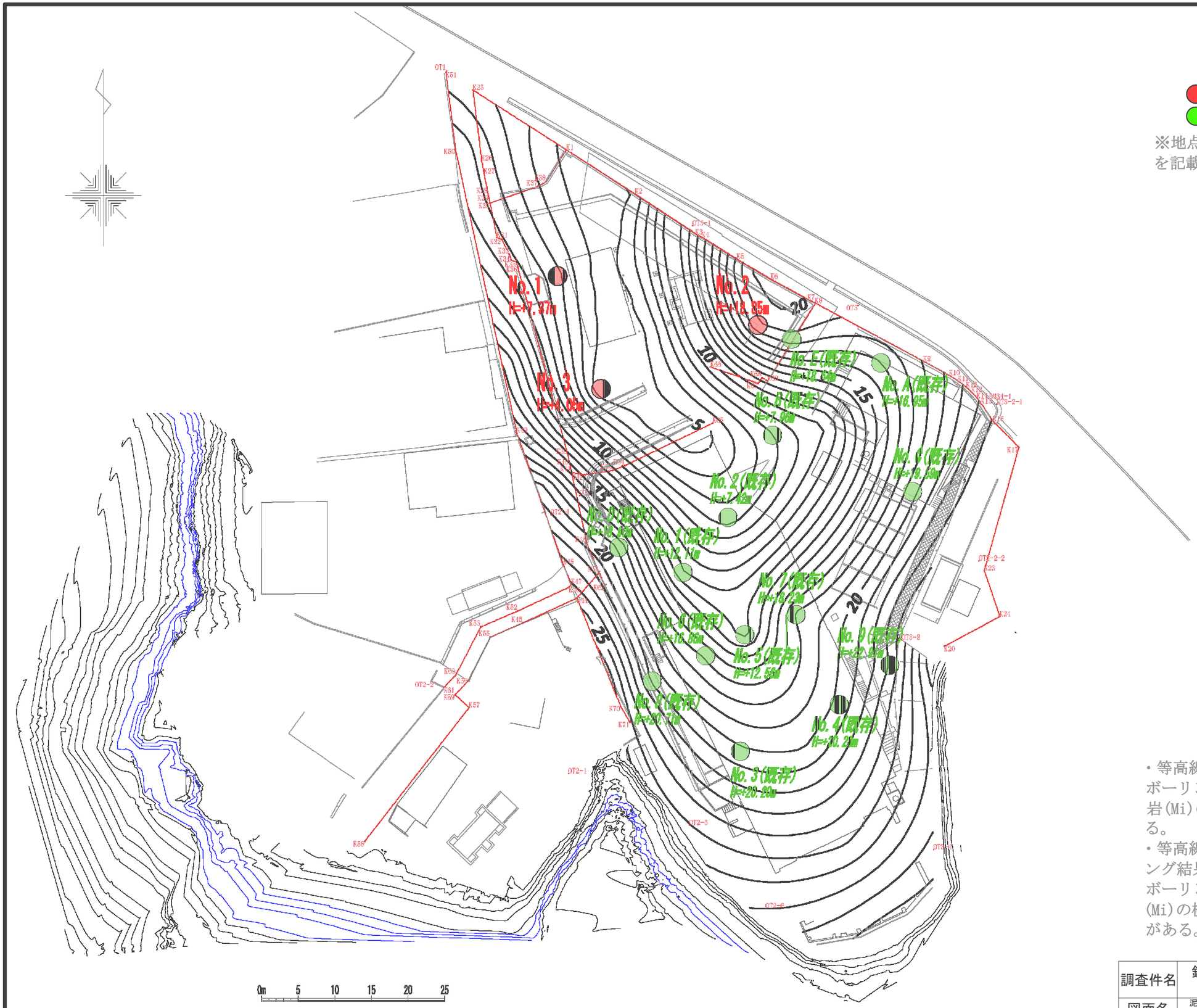
●・・・既存調査位置

※地点名の下に泥岩(Mi)の上面標高を記載した。

・等高線は各ボーリング地点（既存ボーリング含めて）で確認された泥岩(Mi)の上面標高を表したものである。

・等高線は既存および今回のボーリング結果を反映している。そのため、ボーリング未実施のエリアの泥岩(Mi)の標高は実際とは異なる可能性がある。

調査件名	鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託(地質調査業務)		
図面名	泥岩(土丹)の上面標高想定等高線図	縮　尺	S=1:500(A3)



凡　　例

●・・・今回調査位置

●・・・既存調査位置

※地点名の下に泥岩(Mi)の上面標高を記載した。

・等高線は各ボーリング地点（既存ボーリング含めて）で確認された泥岩(Mi)の上面標高を表したものである。

・等高線は既存および今回のボーリング結果を反映している。そのため、ボーリング未実施のエリアの泥岩(Mi)の標高は実際とは異なる可能性がある。

調査件名	鎌倉市名越中継施設整備発注支援等業務委託(地質調査業務)		
図面名	泥岩(土丹)の上面標高想定等高線図（着色なし）	縮　尺	S=1:500(A3)